

秋

白秋全集
23

詩文評論
9

白秋全集 23

第二回配本(第1期 一、二、四卷)

一九八六年八月七日 発行

定価三四〇〇円

著 者 北 原 白 秋

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目五番五
発行所 緑 川 波 書 店

電話 〇三・六五・四二二
振替東京六二六四〇

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

『かなしき鎖』

はしがき	五
その一	七
その二	一九
その三	四一
その四	五三
その五	七五
その六	九七
その七	一二三
その八	一五九

その九	二四
その十	二五
その十一	二六
その十二	二七
その十三	二八
その十四	二九
その十五	三〇
巻末に	三〇

『香ひの狩獵者』

はしがき	一五
------	----

I

雜塵抄	一八
-----	----

一言(二八)	徳(二九)
雑塵(二八)	瑠璃杯(二九)
微塵数(二九)	写楽(二九)
日のおちば(二九)	広東蕎麦(二九)
月と塵(二九)	獅子(二九)
梁塵秘抄(二九)	蕨(二九)
白菊(二九)	顕微鏡下(二九)
香ひの狩獵者(一—32)	
白い格	白くてすべないものは(二四)
格(二二)	遠白いもの(二四)
真珠(二二)	白い鯉(二四)
一首の箴(二二)	鶴(二四)
白磁の壺 I(二三)	小瑠璃の卵(二五)
白磁の壺 II(二三)	白鷺(二五)
竜胆(二三)	
鵲(二三)	
冬つれづれ	
風のたより(二五)	月夜には(二五)
風に寄せて(二五)	寒の百合(二五)
白磁の壺(二五)	冬の面型(二五)

男郎花(三九)	ちろん(三〇)
言葉よりは(三〇九)	鶯(三〇)
山茶花も(三〇九)	夜ふけの(三〇)
眶毛が(三〇九)	川霧が(三二)
白鷺(三〇九)	冬つれづれ(三二)
風に木の葉(三〇)	
短 唱	三三
寒に光るもの	三三
硯 に(三三)	霜 に(三三)
風 に(三三)	十一月(三四)
寒 に(三三)	嚴 冬(三四)
月 に(三三)	チェロ(三四)
梢 に(三三)	
鶴	三五
貧(三五)	狂(三六)
賢(三五)	痴(三六)
盲(三五)	
春信三章	三七
鶯 鶯(三七)	千 鳥(三八)
白 鷺(三七)	

醉中春信・・・・・・・・・・・・・三九

I 浜寺篇・・・・・・・・・・・・・三九

ほのぼのと(三九)

ある画帖に

ここはな(三〇)

風の中に(三〇)

春 夕(三二)

落 日(三二)

ある男のことを聴きて

日柄喜(三二)

お 庭(三三)

II 那羅に・・・・・・・・・・・・・三六

奈良漬(三六)

鹿の子(三七)

母刀目に代りて、那羅に

春 雨(三七)

おなじく代りて、未だめとらぬ

那羅に

III 奈良篇・・・・・・・・・・・・・三九

秋篠の水は(三九)

東大寺(三〇)
ある女

奈良の霧(二三〇)

夢 殿(二三三)

早 春(二三〇)

石の目(二三三)

春日野(二三二)

女 童

若草山(二三二)

法隆寺(二三四)

灌仏会(二三二)

法隆寺西院(二三四)

日 永(二三二)

舞 子

ある女

招かぬ春 二三五

寛ぎは(二三五)

鯉と鮒(二三六)

ある朝(二三五)

何が春(二三六)

途 上(二三六)

トントン(二三七)

御歳暮(二三六)

風 見(二三七)

II

漆胡瓶 二四〇

漆胡瓶(二四〇)

織くして長久なるもの(二四二)

硝子の文鎮 二四三

玉蘭の果(二四三)

大寫しの白牡丹(二四七)

硝子の文鎮(二四四)

無限に遊ぶ(二四八)

紙の葉(二四五)

雪の面型……………三二

雪の面型(三二)

徳について(三五)

夢殿の囃(三五)

白昼鬼語……………三四

小序(三四)

六月五日(三六)

春昼牡丹園(三五)

桃二つ(三六)

牡丹(三六)

暗合一二(三六)

蛙のあとあし(1—44)……………三九

III

野鳥……………二〇

未知の世界(二〇)

コルリの卵(二〇)

鳥の巢(二〇)

聖なる鳥(二〇)

白きもの……………二四

ほうやりとして(二四)

父の髻(二七)

白い満月(二五)

雪……………二八

白くつむ雪(二八)

筆を惜む(二九)

萌えさかる若葉(1—2)……………二九

この母を持つ幸福	二九四
遷宮奉拝記より(1—2)	二九八

IV

季節の中に	三〇一
-------	-----

蜆蝶(三〇二)	利休居士(三〇八)
---------	-----------

秋草(三〇三)	新居(三〇六)
---------	---------

落葉松(三〇四)	牡丹の木(三〇〇)
----------	-----------

象牙の筍(三〇四)	野菊の堂(三二)
-----------	----------

一月の月光(三〇五)	薄明(三二三)
------------	---------

二月の雲(三〇六)	通草(三二三)
-----------	---------

隣の松(三〇七)	
----------	--

V

王禅寺に想ふ	三二六
--------	-----

朴の葉消息	三二七
-------	-----

後記	三三二
----	-----

後記	三三三
----	-----

『鎖』



〔昭和13年5月10日
アルス刊〕

例實削添

鎖 かなしき

書叢磨多
篇三第



著秋白原北

A R S

〔本扉〕

はしがき

鎖はかなしきと訓む。鎖は鍛錬の台である。そこで多磨の鎖の意味するところは明瞭であらう。わたくしは多磨の砧に住み、砧にはあらぬ鎖を短歌鍛錬の台とする。

多磨川にさらす調布たづくりさらさらになんぞこの子がここだ
かなしき

万葉の昔には白い布を晒した多磨、月に砧を打つたであらうが、今鎖にわたくしの打つのは短歌である。語韻は響き、声調は打つに従つて徹る。幽かなりとも、初学の人々の心耳に触れ、心魂に通ふものがあれば幸である。

